ほぼ週刊コラム　「Partnership論」　その９７

**読解（５の２）　1991年回勅『*Centesimus Annus*（百周年）』第五章**

**verification（真贋判定）：「本質的価値・贋の価値・衰退価値に選別」の具体例**

2014.06.06 rev.1　齋藤旬

　**「新たな資本主義」を始めようとする社会は、高い真贋判定能力を有していなければならない。でないと、ヒトラーの様な贋者に席巻されてしまうから**。

　･･･と、コラム９０で述べた。「新たな資本主義」とは、「あらゆるclose collaboration（親密協業）をそれが贋作just真作justであるかは問わずに、一時的にだが全て「共通善」に含まれると仮定して、fairなjusticeを一時的に適用せず、その成果が広く人々に受け入れられるかどうかを経過観察し、その真贋を判定していく経済運営方法のこと」と説明し、だから、「この様な経済運営方法を採用するためには、その社会が真贋判定において高い能力を持っていなければならない。でないと、ヒトラーの様な贋者に席巻されてしまうから」とコラム９０で説明した。

　今週は、具体的「ヒトラーの様な贋者」の例、あるいは、ヨハネ・パウロ二世の言うところの「自分達の時代にふさわしい価値によってもっと上手く代替できる衰退価値」の例、あるいは、贋作判定ないし衰退判定の俎上にあがっている例、これらを幾つか、今までの様々なInnovation Challengeなどの中から、思いつくままに挙げてみよう。イメージで言うと、例えば、原子力発電とか、タブレットに押されるPCとか…。

　･･･と列挙する前に、真贋判定（verification）のオサライをしておこう。

　**真贋判定（verification）の説明は、回勅『百周年』第50段落にあった**。その部分を抜き出すと：

**50**.　過去と未来の世代も含めた対話による、truth探求のopen search、即ち、世代ごとの探求によりtruthをrenewalしていくこと、これにより、その民族の文化（the culture of a nation）の特徴が引き出されていきます。つまり、長年受け継がれてきた価値の伝統遺産（the heritage of values）に、各世代の若者達は常に戦いを挑（いど）みます。この様な挑戦は、必ずしも破壊やa prioriな拒絶（齋藤補遺：簡単に言えば「食わず嫌い」）を意味しません。むしろ、何よりも、若者達自身の生活の中でこれらの価値を試し、この地上世界での体験による真贋（しんがん）判定（this existential verification）を通して、価値の選別を行うのです。即ち、伝統の中にあり自分達にとっても有効な本質的価値、贋（にせ）や誤りの価値、自分達の時代にふさわしい価値によってもっと上手く代替できる衰退価値、これら三種類に選別し、自分達の価値および価値観を、より現実に適合し、且つpersona的なもの（more real, relevant and personal）としていくのです。･･････

この「open search」、1991年に使われた表現だが、今流行の「open innovation」を彷彿とさせる。さすがヨハネ・パウロ二世。21世紀の世界を垣間見ていたのかもしれない。

　**この様な真贋判定を通じて「共通善」を見出していく、即ち、「共通善」の新たなパーツを見出していく**。

「共通善」の見出し方法についてはもう一箇所言及がある。それは、第47段落の中ほど：

･･･共通善とは、個別のinterestsの単なる合計ではありません。共通善は、これら個別のinterestsをいかにassessmentしintegrationするかにかかっています。このassessmentとintegrationは、さまざまな価値を、衡平を保ちつつ階層化することによって形成されるbasis（the basis of a balanced hierarchy of values）によって進められます。他方、究極的には、この様に共通善を見いだしていくには、the personの尊厳と諸権利のcorrect understanding（[中国語版](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_01051991_centesimus-annus_zh.pdf)では「正确的了解」）が必要です。･･･

この「個別のinterestsのassessmentとintegration」も、真贋判定（verification）とほぼ同じ概念だと言って良いだろう。また、「さまざまな価値を、衡平を保ちつつ階層化することによって形成されるbasis」というのは、Partnership会計で使われる専門用語：basisと同じ定義だ。これは当然。なぜなら、真贋判定が行われ、共通善の新たなパーツが見出されていく場が、Partnershipつまりclose collaboration（親密協業）あるいは第49段落に出てくるintermediate communities（齋藤補遺：Partnership等の中間団体、中間的共同体）の場であるからだ。言い換えれば、partnershipとclose collaborationとintermediate communityという三つの用語は、同じ場 --- *something*候補を試す場、を意味していると言って良いだろう。

　最後の文章：「究極的には、この様に共通善を見いだしていくには、the personの尊厳と諸権利のcorrect understandingが必要。」というところは、コラム８９で、集合論のVenn Chartを使って説明した、『共通善とは、（過去と未来の世代も含めた）全ての人間の、「人間の尊厳（または*something*）」の重なり合った部分の集積、即ち「積集合」』、というのと同値の表現と言って良いだろう。

ただし、$\left\{共通善\bigcap\_{}^{}\overline{過去現在未来の全人類の人間の尊厳の積集合}\right\}\ne 空集合$　かもしれない。即ち、共通善は、遠い将来の人智をも超越したもの、つまり、人智では将来にわたって到達しえないもの、なのかもしれない。「∞（無限大）－ 有限確定値 ＝ ∞（無限大）」の様な関係にあるのかもしれない。

　**さて、**「**贋の価値」「衰退価値」の具体例に行く前に、人智が生み出した「本質的価値」について考えてみよう**。Innovationを目指すエンジニアの一人である私としては、この順番でないとやりきれない。

**人智が生み出した「本質的価値」の例：**

西洋の科学革命と産業革命以降に発明された多くのものが、これに当てはまるだろう。即ち、「溶鉱炉」「鉄器」「内燃機関（エンジン）」「電気」「半導体」「トランジスター」「LSI」「自動車」「飛行機」「電車」「Computer」などなど、勿論、沢山ある。

　社会科学が生み出した「本質的価値」も沢山ある。例えば、「マネー」「国家」「三権分立」「民主主義」「人権（human rights）」などなどだ。西洋社会だとこの範疇に「universalism」「subsidiarity & solidarity」「人間の尊厳 & 共通善」を加えるだろう。

　なお、「本質的価値」を生み出す白眉は --- 特に近年 --- 「生命科学」だ。「遺伝子解析による創薬」や「iPS細胞による再生医療」など、使い方さえ間違わなければ「本質的価値」を生むだろう。ただ、自然科学と人文社会科学の重なり領域である「生命科学」は、EthicsやReligionやPhilosophyなど「人間の生き方」「社会のあり方」に関するテーマと関連が深い。見方を変えれば、EthicsやReligionやPhilosophyなどの問題に或る程度の統一見解が見つからない限り、生命科学が多くの「本質的価値」を生み出す時代はやってこないだろう。先週紹介したIEEE Ethicsが発足する由縁だ。

　**20世紀末頃から、「贋の価値」「衰退価値」等が目立つようになった。**この時期から目立つ様になった原因は、恐らく「文明の高度化」、およびそれに伴う「価値観の多様化」と「公害等の予想外の負の効果、経済学で言うところのexternality（外部性）」だと思う。それらが或るthreshold（閾値）を超えたのだろう。

「贋の価値」「衰退価値」が頻出するのは避けがたいことだ。喩えるなら、育ち盛りの健康な人の体。それは百兆弱の細胞から成るが、育ち盛りであるがために細胞分裂が活発であり、その分、遺伝子のコピーにミスが出て、癌細胞が1日平均五千個も出来てしまう。即ち、これに見合う「免疫機能」が働いて、癌を小さい内に撃退出来ないと、増殖してその人は死んでしまう。これと同じだ。

ヨハネ・パウロ二世のいう「集団的自衛（collective self-defense）」。これは「免疫機能」だ。「非自己」つまり癌細胞を、早期に見つけ撃退することであり、the new capitalismが始まった「育ち盛り」の社会にとっては、社会の全構成員に課された「義務」だ。

･･･話が少しそれた。元に戻そう。「贋の価値」「衰退価値」の順で考察しよう。

1. **「贋の価値」**

社会科学での例がすぐに思い浮かぶ。即ち、「サブプライム・ローン」や「CDS（credit default swap）」が思い浮かぶ。金融工学でノーベル経済学賞を受賞した学者らも設立（1997年）に加わり、その後あえなく倒産したLTCM社も、贋の価値の範疇だろう。

社会科学での「贋」判定の俎上にあがった価値、この例は自然科学出身の私には直ぐには思いつかない。読者の方で、思いつく方いらっしゃいましたらお教えください。

　自然科学での「贋の価値」の例は、なんといっても「原爆」「水爆」だろう。ひところ、「核による抑止力」で平和維持するという主張があったが、これは贋者の主張だと思う。百歩譲って、地上世界での業（ごう、カルマ）としての価値はあるかも知れないが、「Godの右（right）の座に着く」様な本質的価値は決して持っていない。

冷蔵庫の冷媒用途などに開発された「フレオン」も --- 発明者の気持ちを思うと「残念ながら」だが --- 「贋の価値」だった。オゾン・ホールの原因になってしまい、人類全体と地球全体に甚大な被害をもたらしてしまった。

また、自然科学での「贋」判定の俎上にあがった価値ならば、「原子力発電」が思い浮かぶ。わたし個人としては、日本という「地震の多い地域」に限って言えば、原発はメリットよりもデメリットの多い「贋の価値」だと判明したと考える。日本は二三世代の期間、忍耐生活を覚悟して、再生可能エネルギーへの切替えを優先すべきだと思う。この切替えのための、エネルギー分野における或る程度の「計画経済」は、不本意ながら、避けられないのかもしれない。ヨハネ・パウロ二世ではないが、全体主義に陥らないか心配になる。くれぐれも、全体主義に陥らない様に、例えば、「50年間の時限にする」、「「切替え」が済んだ地域にはスマート･グリッドなどの電力自由経済を取り入れて「計画経済」の規模は漸次縮小させる」、あるいは、「業者選定に「マッチング入札制度」を導入する」、といった二重三重の予防策を打っておく必要があるだろう。

なお、「シェール・オイル」や「メタンハイドレート」は、「予想外の負の効果」が将来出てこないか慎重に検討すべきだ。前者では、地殻に大量注入する酸またはアルカリの高圧溶液が将来において惨事を招かないか、後者では、深い海底の低温高圧下に固体として閉じ込められた大量の温室効果ガスを解放することになりはしないか、慎重に検討すべきと思う。大規模に展開するのは、それら検討の結果を待ってからにすべきだ。

「「贋」判定の俎上に挙った価値」で特記したいのは、Ethics（倫理）が絡むテーマだ。「無人偵察機による暗殺」や「ロボット兵士」は誤認殺人が払拭できず、「贋」判定の俎上にあがるのは避けられない。また、「贋」とまでは言えないが、例えば、自動運転の自動車。以下の場面を想像して頂きたい。人身事故回避が不可能で、右にハンドルを切ればAさんに衝突し、左にハンドルを切ればBさんに衝突する、直進ならCさんに衝突するというような場合、果たしてComputerに運転判断を任せて良いものなのかどうか、という問題を抱えている。災害現場で重傷軽傷を判断する、所謂「トリアージ」も、「自動化して良いのか」という同様の問題を抱えている。

この様な「Computerに判断を任せて良いものなのか」という設問は究極的には「Computerに人と同じconsciousnessを持たせ得るのか」という、議論の多い問題に行き着く。この様に、EthicsやReligionやPhilosophyなども絡む科学技術テーマが、近年多くなってきている。これも、IEEE Ethicsが開催された由縁の一つだ。

1. **「衰退価値」**

社会科学での例としては、「法人税制（Corporate Taxation）」と「多数決民主主義」が「衰退価値」として思い浮かぶ。完全代替は未だ必要ないと思うが、それぞれ「Partnership税制」と「熟議型民主主義+自律分散」に漸次置き換えていくべきだろう。つまり、「法人税制（Corporate Taxation）」と「多数決民主主義」に付すべきテーマは、減少していってゼロないし一定割合に漸近する傾向にあるのだろう。遠い将来、もし、人智による発展の余地が無くなる、または少なくなる、となった後、更に、それでもなお人類全体として「不足」が残っていて「富の分配」の問題が残っているならば、法人税制と多数決民主主義が主流として復活し、強制的「富の分配」を或る程度の規模で行う可能性は、無くは無いけれど…。

また、社会科学での「衰退」判定の俎上にあがった価値、この例は自然科学出身の私には直ぐには思いつかない。読者の方で、思いつく方いらっしゃいましたらお教えください。ただ、「農業」が、放っておけば「衰退価値」になってしまうような気がする。だから、税制や所得再分配を工夫して、農業が持つ「自然環境保全」の機能や「人手による食物づくり」は意図的に残すべきだと思う。

自然科学というか科学技術分野での「衰退価値」「衰退判定の俎上にあがった価値」、これは枚挙にいとまがない。技術革新のスピードが速くなったからだ。白熱電球が蛍光灯に代わり、いまLEDに代わりつつある。固定電話が携帯電話に代わり、いまスマホに代わりつつある。PCもタブレットやスマホに置き換わっていくのかもしれない。

「交差点の信号機」も、将来、自動運転の自動車やITS（Intelligent Transport System）が発達すれば「衰退価値」となっていくのだろう。この辺り、先々週シカゴのIEEE Ethicsで知り合ったミロシュ・ムラデノヴィッチ君が、自身の博士論文の一部を発表して、若手学会賞を受賞する中、説明していた。この話題は、また後日に…。

**さて、今週号も長くなってしまった**。もうすぐ百号。実は近々、当コラムの今まで二年間の「ネタ」をまとめて講義ノートを作り、「米国Partnership税制勉強会」を立ち上げる運びとなった。月一回、90分程度の講義を行いその後30分程度ディスカション。これを二年間ほど行い、書籍にしたいと思っている。準備が整い次第、「受講者募集」を始める予定。ご関心のある方は、junsaito@jcom.home.ne.jpまでお問い合わせ下さい。

今週号を書いていて思ったのは、「仕事をするなら本質的価値づくりに就きたい」ということ。「贋の価値」づくりに就きたくないのは当たり前だが、代替されてしまう「衰退価値」づくりにも積極的には就きたくないと思った。若い人達の就職活動の参考になれば幸いだ。

今週は以上。来週も乞うご期待。